

# 1920年代に入る頃のオランダ領東インドの プラナカン華人作家によるマレー語創作小説

—タン・ブン・キン（陳文金）に焦点を当てて—

北野 正徳

倉敷芸術科学大学芸術学部

(2001年9月28日 受理)

## はじめに

本稿は、オランダ領東インド（以下、東インドに略称）時代のプラナカン華人（現地生まれの華人、以下、プラナカンに略称）の著名作家のひとりであるタン・ブン・キン（Tan Boen Kim, 陳文金）の作品を主な題材にして<sup>1)</sup>、1920年代に入る頃の東インドのプラナカンによるマレー語創作小説（以下、創作小説と略称）の作品様式の展開を論じるものである。とりわけ、本稿は、この時期にプラナカンの創作小説で描かれる話題の種類とその描き方に特定のパターンが形成されて、彼らにとって小説というジャンルの境界が画定したことを検証することを目指している。

本稿が1920年代に入る頃の時期とタン・ブン・キンに注目する理由は、以下のようなものである。まず、1920年代に入る頃の時期は、東インドのプラナカンによる創作小説の作品様式の移行を示す時期として興味深い。東インドにおいては、19世紀末より主にユーラシアン（欧亜混血者）によってマレー語創作小説が書かれるようになった。この最初期の創作小説は、プラナカンによる作品も含めて、基本的には、新聞の三面記事的な話題（殺人・強盗など）を題材にした娯楽的な作品様式を持っている<sup>2)</sup>。それに対して、1920年代中頃からプラナカンの創作小説の標準的作品は、恋愛や社会習慣をめぐる近代的価値規範の問題を取り上げるようになり、最初期の諸作品のようなセンセーショナルな娯楽的性格は退潮している<sup>3)</sup>。このような作品様式の移行は、ちょうど、1910年代を通じて1920年代に入る頃の時期に進展したと見られる。そこで、本稿は、この時期に注目して、プラナカンの創作小説の作品様式の移行を論じることを構想している。

次に、タン・ブン・キンに注目する理由としては、彼が1920年代半ば以降のプラナカン作家たちとは対照的に、最初期の創作小説のセンセーショナルな様式を多く残していることがある。後述するが、タンは、小説作家であると同時に、1910年代を通じて、オランダ植民地政庁に対して最も反抗的なプラナカンのジャーナリストのひとりだった。そして、そのような彼が書く記事はしばしばセンセーショナルな反響を呼んだと言われている。従って、このような経歴から、タン・ブン・キンは、1920年代に入る頃までのプラナカン

\* 倉敷芸術科学大学非常勤講師

の創作小説作家で、最も政治的にラジカルなひとりであったと見られる。そこで、本稿は、このような伝説的なジャーナリストの創作小説がどのようなものであるか、そして、彼の小説作品が、最初期の諸作品から1920年代半ば以降の諸作品への作品様式の移行とどのような相関関係にあるかを検討することにする。このような理由と手順で、本稿は、タン・ブン・キンの作品を題材にして1920年代に入る頃に進行したプラナカンの創作小説における上述のようなジャンル形成の過程を検討してゆきたい。では、本論の導入として、彼の経歴を振り返ることから議論を始めたい。

### 伝説的ジャーナリスト

タン・ブン・キンは、1887年にバタビア（現ジャカルタ）で生まれて1959年に同地で没している [Salmon 1981: 310-313]。彼は、小説とジャーナリズムの作法を独習し、1910年代前半にはバタビアのプラナカンの新聞雑誌界で活動を開始している。彼は、小説創作も活動的で、同じ頃から多くの作品を出版している。彼の経歴は、1910年代から1920年代前半頃までが最も活動的で、1930年代以降は作品創作も減少している。インドネシア独立後の晩年は著しい貧困に陥っていたようで、1959年にジャカルタで没している。

タンは、1910年代のプラナカンのジャーナリストを代表するひとりである。彼は、競合誌やオランダ植民地政庁に対して非常に敵対的で、これらの敵対勢力に対して、常に辛辣な皮肉を放つだけでなく、暴力沙汰を繰り返し、何度も逮捕拘留を経験した。このような経歴から、彼は、伝説的なジャーナリストとしての地位を獲得したようである。もっとも、彼が特定の政治的立場を主張してそれを貫くために闘争的な活動を続けたわけではない。1910年代は、東インドのプラナカンの法的地位（身分）をめぐる、彼らの政治的活動が高まった時期であるが、タンがそのなかで特定の立場から継続的な関与を示した記録はない。それでも、以上のような「派手な」活躍を通じ、1910年代を代表するジャーナリストとして彼が認知されてきたことは確かである。

創作小説の作家としても、タンは多くの作品を書いている。彼の作品創作は、1910年代が最も活発で、1920年代にはその余勢で書かれたと思われる作品がいくつかあり、1930年代には実質的に創作活動は休止している。また、彼は1920年代中頃からプラナカンの創作小説で主流となる『人生』(Pengahidoepan) や『ロマン小説』(Tjerita Roman) などの月刊小説誌では作品を残していない。年齢的に見ても、1887年生まれの彼は、これらの月刊小説誌で中心となっていた1900年以降の生まれの作家たちよりも、ひと世代の年齢差がある。このように、基本的には、彼は、1920年代中頃の『人生』や『ロマン小説』などにおける標準的創作小説よりはひとつ前の世代の書き手である。

このことから、タン・ブン・キンは、19世紀末から20世紀初頭に登場した東インドにおける最初期の創作小説と、1920年代中頃の標準的作品との中間に位置する書き手であると見ることができる。従って、彼の作品を通じて、最初期の創作小説から1920年代中頃以降

の標準的作品への作品様式の移行を検討することができると考えられる。とりわけ、最初期の作品のセンセーショナルな娯楽的性格と、1920年代以降の作品に顕著な近代的価値意識への志向が、彼の作品でそれぞれどのように展開しているかが注目される。それでは、以上のような視点に基づいて彼の作品を紹介・注釈してゆきたい。

### タン・ブン・キンの作品（その1：娯楽的側面）

ここではまず、タン・ブン・キンの創作作品（その殆どが小説である）の娯楽的側面に中心に検討してゆきたい。この文学的性格は、基本的に、最初期の創作小説の特徴を引き継いだものであると見られる。そこで、ここでは、彼の作品において、最初期の創作小説の特徴がどのように引き継がれているか検討してゆきたい。なお、タンの創作小説は、大きく3種類に分かれる。それらは、①犯罪読み物、②記録小説（作品そのものは虚構である）③オーソドックスな創作小説（写実小説）である。それでは、続いて、これらの作品を順に紹介・検討してゆこう。

まず、犯罪読み物は、実際に起こった犯罪を題材にして書かれたものとされている。この種の作品は、最初期の創作小説の様式を最も多く引き継いでいる。タンの犯罪読み物には、まず『少女フィエンチェ・ド・フェニックス』（*Nona Fientje de Feniks*, 1915年?）がある [Salmon 1981 : 311]。この作品は、1912年にバタビアで起こった殺人事件を物語るものである。作品の主人公は、題名にあるフィエンチェで、彼女はユーラシアン（欧亜混血）の売春婦である。彼女には、同じくユーラシアンの恋人プリンクマンがいたが、彼は売れっ子売春婦のフィエンチェに群がる男たちに嫉妬して彼女を殺害してしまう。この作品は、売春婦をめぐる痴情事件というセンセーショナルさを呼び物にした娯楽的読み物としての性格が顕著である。また、この作品は、1912年から1915年という、作品の出版時期とほぼ同時代の事件を取り扱っており、三面記事的なセンセーショナルリズムが前面に出ている。さらに、この作品には、韻文（定型詩）の形式でこの種の三面記事的な内容を音韻の調子良く物語る版も出版されており、作者がこの物語を娯楽的作品として仕立てようとしていた意図が強く表れている [Tan Boen Kim : 1923]。

同様の犯罪小説としては、『グリッセの強盗』（*Rampok di Grissee*, 1918年）がある [Tan Boen Kim 1918]。この作品は、1917年に東ジャワの小都市グリッセの裕福な華人家庭で起こった強盗事件を再構成して物語るものである。この強盗事件は、5人組の華人（すべて前科者の悪党たち）が官憲に変装して被害者の家を訪れ、贖金検査をすと言って金品を提出させてそのまま持ち逃げしたというものである。この作品では、真偽は確かめることができないが、悪事の計画から、実行、逃走、そして逮捕後の取調べに至る事情が、仔細に再構成されて物語られている。とりわけ、強盗団が官憲に変装して被害者宅を訪れる様子がテンポよく物語られており、この作品の娯楽性の高さが表れている。また、この作品は、1917年に起こった事件とその決着を追うようなかたちで1918年に出版されており、

同時代の話題の事件を書くという意味で、当時の読者の関心を集めたものと推測される。

以上のように、タンの犯罪小説は、最初期の創作小説のセンセーショナルな娯楽的性格を引き継ぎながら、同時代のジャーナリズムの手法を取り入れている。それでは、次に、彼のジャーナリストとしての特徴がより顕著に現れている記録小説を見てみよう。

彼の記録小説は、同時代の社会政治的出来事を題材にし、虚構と脚色を加えて小説として仕立てたものである。これらの作品は、先の犯罪小説にも関連するが、おそらくは、彼のジャーナリストとしての手法がより前面に現れたものである。

このような記録小説として、まず『少女キン・リアン』(*Nona Kim Lian*, 1916年)という小説を挙げることができる[Tan Boen Kim 1916]。この作品は、中国の広東を舞台に、辛亥革命(1911年)に向けて活動する孫文と、彼と行動を共にするジャーナリストたちを描いた一種の政治冒険小説である。題名に見える少女キン・リアンは、副主人公であるジャーナリストのひとりの許婚で、孫文たちと冒険を共にしている。この小説は、タン自身の創作なのか、それとも何らかの原作があるのか判断しにくい作品であるが、近過去の出来事と虚構が交差するような書き方で、ジャーナリスティックな性格と娯楽的性格とを合わせ持っている。また、作中のそこかしこに、作者タンの脚注という体裁で、東インド政庁に対する諸々の批判が発せられており、娯楽的作品を通じて政治風刺も読めるように構成されている。このような特徴とともに、『少女キン・リアン』は、最初期の創作小説の娯楽的性格に、ジャーナリズム的な性格が加わったものになっている。

また、同様の性格を持った作品として、『クドゥスでの騒乱』(*Peroesoehan di Koedoes*, 1920年)もある[Tan Boen Kim 1920]。この作品は、1918年に中部ジャワのクドゥスで発生したインドネシア人による反華人暴動を記録したものである。この事件は、クドゥスのタバコ産業を独占してゆく華人に嫉妬したインドネシア人が引き起こしたものとして描かれている。この作品も、ジャーナリスティックな事実の記録に、虚構と脚色が接合されており、物語として読めるルポルタージュというような様式を持っている。そして、反華人暴動というセンセーショナルな事件を題材にしている点で、従来の創作小説の性格を引き継いでいる。なかでも、インドネシア人の登場人物を設定して、彼らが暴動を引き起こしてゆく様子を物語る(虚構として)という手法は、このようなセンセーショナルな事件に対する興味(好奇心)を掻きたてるために使用されているようである。このように、タンの記録小説は、事実の記録と虚構の接合を通じて、同時代の社会的事件を娯楽的に、そしてセンセーショナルに描くものであった。では、続いて、彼のその他の創作小説を見てみよう。

彼のその他の創作小説は、今日的な観点から見て、よりオーソドックスな創作小説(写実小説)の様式を持っている。もっとも、外観的には、センセーショナルな雰囲気を出した表題を掲げた作品が多い。例えば、彼が最も早い時期に書いたと推測される作品は、『娼婦の秘密』(*Boekoe Tjerita Resianja Goela-Goela*, 1912年)という題名を掲げている

[Tan Boen Kim 1912]。この作品は、バタビアの娼館に出入りする放蕩息子たちが強盗殺人事件を犯すという犯罪小説の体裁を取っている。おそらく、彼は、扇情的な雰囲気を出して読者の関心を引くために、このような題名を使用したであろう。

同様の作品として、『少女ガン・ヤン・ニオ』(*Nona Gan Jan Nio*, 1914年)と『少女ラン・イン』(*Nona Lan-im*, 1919年)がある[Tan Boen Kim 1914, 1919]。これらの作品は、先に紹介した『少女キン・リアン』と同様に、どちらも「少女」という題名を掲げている。とりわけ、後者には「秘密の中の恋」という副題も与えられている[Tan Boen Kim 1919]。これらのことから、彼のこの時期の作品には、「少女」という題名とともに一種センセーショナルな好奇心を読者に演出することが定着していたことがわかる。そして、そのセンセーショナルさは、若い世代が恋愛を行うということのようである。例えば、『少女ガン・ヤン・ニオ』では、19世紀中頃という時代設定のもとで、ふたりの相思相愛の若者(そのひとりが主人公の少女ヤン・ニオである)が恋文を交し合う様子が描かれている。同様に、『少女ラン・イン』でも、二人の若い男女(そのひとりが主人公のラン・インである)が恋に落ちるといふ筋立てである。どちらの作品も、1910年代という時代背景を考えれば、若者世代が恋愛を通じて自由に結婚相手を探すという話題そのものが、当時の東インドのプラナカン社会においては、いささかセンセーショナルな話題であったと見られる。

以上のように、タン・ブン・キンの犯罪小説、記録小説、そして一般的な創作小説のいずれにおいても、東インドにおける最初期の創作小説の持つ娯楽的性格が見られることが確認された。このことは、彼が、先行する諸作品の人気を利用して、その流れの中に自分の作品を位置付けたものと見られる。言い換えれば、上述のような娯楽性は、1920年代に入る頃のプラナカンの創作小説において、まだ一通り定着していた。しかし、それと同時に、タンの作品には、1920年代半ば以降に定着してくる作品内容も見られる。では、それがどのようなものか、これまで見てきたタンの作品の別の側面を検討してゆきたい。

### タン・ブン・キンの作品(その2:近代的価値規範をめぐる側面)

ここでは、1920年代後半のプラナカンの創作小説で定着している近代的価値規範をめぐる諸々の知覚が、タン・ブン・キンの作品でどのように現れているかを見てゆく。もちろん、20世紀初頭の最初期の創作小説においても、非常に断片的ではあるが、例えば、法に基づく結婚の重視などといったかたちで、近代的価値規範に対する知覚が現れていた<sup>4)</sup>。しかし、最初期の創作小説においては、これらの題材が、作品構成の中心になるには至っていなかった。それでは、タン・ブン・キンにおいては、1920年代半ば以降はプラナカンの創作小説の中心的話題となっている近代的価値規範に対する知覚が、どの程度作品のなかで重要な地位を占めているのか、以下に検討してゆきたい。

まず、彼の犯罪読み物は、総体的には、最初期の創作小説のようなセンセーショナルリズ

ムを強調した作品で、近代的価値規範に対する問題意識はそれほど顕著ではない。先に紹介した『フィエンチュ・ドゥ・フェニックス』と『グリッセでの強盗』においても、それぞれの犯罪を読者の好奇心をかきたてるように物語ることが、作品構成の中心となっている。言い換えれば、犯罪小説は、タン・ブン・キンが書くいくつかの種類の創作小説において、東インドの最初期の創作小説の様式を最も強く引き継いだものである。

続いて、彼の記録小説は、センセーショナルな娯楽的性格と同時に、近代的価値規範に対する問題意識も強く現れている。例えば、『少女キン・リアン』においては、孫文の活動をめぐって読者が虚構と現実を往来するような冒険的な読書経験が創出されているが、このような娯楽的性格に劣らず、20世紀初頭より東インドでも本格的に展開してきた華人民族主義が、作品のそこかしこで言及されている。しかも、そこでは、華人民族主義が東インドのプラナカン華人たちを近代化するものとして、積極的に称揚されている。おそらく、タンは、望ましい近代的価値規範のひとつとして華人民族主義を読者に伝達しようとしたものと見られる。そのために、その調子は、彼がジャーナリズムで展開しているような政庁に対する挑発的批判に比べて、かなり穏健なものである。このように、タンのような「過激な」ジャーナリストにおいても、小説という枠組みにおいては、社会政治的话题を価値規範の問題という文脈で熱心に取り上げていることが確認される。

同じように、彼のもうひとつの記録小説である『クドゥスでの騒乱』でも、近代的価値規範への関心が明瞭に現れている。表面的には、この作品は、インドネシア人による反華人暴動の凄まじさ（センセーショナルさ）を読ませるものとして書かれている。しかし、その一方で、タンは、暴動の原因である華人の経済成長を、華人の勤勉さと公正な競争の結果であると説明し、その正当性を擁護している [Tan Boen Kim 1920: 9]。また、暴動という手段に訴えたインドネシア人たちを、嫉妬と憎悪に駆られた結果であると非難している [ibid: 26]。このような書き方から理解されることは、タンが、この暴動を近代競争社会の価値規範から逸脱するものとして見ていること、従って、彼が近代的な価値規範を積極的に読者に伝えようとしていることである。題名と話題のセンセーショナルさにも関わらず、『クドゥスでの騒乱』は、華人社会の近代化を擁護し、彼らの従う近代的な価値規範に対する賛意を作品の主題にしている。以上のように、タンの記録小説においては、華人社会の近代化をめぐって、近代的価値規範に対する作者の強い関心が現れており、作品構成のなかで中心的な位置にあることがわかる。

最後に、彼のオーソドックスな創作小説では、近代的価値規範の問題は作品の主題になっている。先に紹介した『少女ガン・ヤン・ニオ』と『少女ラン・イン』は、ともに、若者たちの恋愛を描いている。しかも、これらの作品は、親が子供の縁組を行うのが一般的だった当時の社会背景のもとで、若者たちの恋愛をスキャンダラスでセンセーショナルなものとして描いている。

しかし、実際には、これらの作品での若者の恋愛は、若者たちが従いつつある近代的価

価値観を称揚するものとして描かれている。しかも、これらの作品では、若者たちが自分の恋愛を成就させて物語が結末を迎えている。従って、これらの作品では、センセーショナルな題名にも関わらず、若者が自分で結婚相手を決定するという近代的価値観を提示することが作品の中心となっていると見られる。例えば、『少女ガン・ヤン・ニオ』では、相愛の恋人のいる主人公ヤン・ニオの両親のもとに、ある金持ちの家族からの結婚の申し込みがあったことが物語られている。ヤン・ニオの母は、良家の息子との縁談に心引かれたが、ヤン・ニオを自分の意思を貫いて恋人との結婚を勝ち取って幸せな家庭を築いた。このように、この作品は、家柄や財産よりも若者が自分の意志に基づいて結婚相手を見つけることを非常に好意的に描いている。言い換えれば、このことは、この作品の主な読者となっている若者世代の立場から、近代的価値観を擁護したものである。

同様に、『少女ラン・イン』も、若者世代の価値観の優位を表明している。この作品では、主人公の少女ラン・インと大地主の青年（彼女同様に華人である）の恋愛が物語られている。彼らは相思相愛になったが、青年の家庭がキリスト教徒であったために、華人の伝統宗教（祖先崇拜）を信奉するラン・インの父が彼らの結婚に反対した。青年は、キリスト教を捨てて伝統宗教に入ることを決意したが、青年の祖父は、青年の意に反して勝手に縁談を組もうとしていた。しかし、作品の結末部では、青年の祖父が急死し、青年がラン・インの家族が信仰する宗教に合流することで、ふたりが幸せな結婚を迎えたと物語られている。こうして、『少女ラン・イン』においても、若者たちが自分の意志に従って結婚相手を見つけることが好意的に描かれている。しかも、筋立てを見ると、この祖父の急死という設定は、物語の展開から見るといささか唐突なものである。そのために、ここでは、作者が若者の価値観に沿った近代的規範の優位を強調しようとしてこの作品を書いたことが推測される。このように、これらの作品は、題名などが演出するセンセーショナルな雰囲気とは対照的に、作品内容は、近代的価値規範の問題を随分意識したものとなっている。タン・ブン・キンのこの種類の創作小説は、以上のような特徴とともに、近代的価値規範の問題を作品の主題として中心的に取り上げており、1920年代中頃のプラナカンの創作小説に標準的な作品様式に既に接近している。それでは、続いて、以上のことを、1920年代に入る頃のプラナカンの創作小説の境界という観点からまとめてゆきたい。

### 創作小説の境界

東インドのプラナカンの政治活動が高揚した1910年代を通じて最もラジカルな作家（ジャーナリスト）のひとりであるタン・ブン・キンの以上の諸作品を検討することから、1920年代に入る頃のプラナカンの創作小説が扱う話題の境界は以下のような範囲であると結論することができる。まず、政治的話題に関して、プラナカンが創作小説のなかで東インドの政治問題を直接議論することは、彼らの政治活動が高揚した1910年代を通じても殆どなく、このような話題は、専らジャーナリズム（新聞雑誌）の領野で取り上げられ

たとえることができる。先に見たように、タンの記録小説は、政治的課題をめぐって、ジャーナリズムの手法が現れた作品であるが、この分野の彼の作品においても、特定の政治的立場を掲げて政庁を批判するというような傾向はそれほど強くない。むしろ、そこでは、一般読者に向けて、望ましい社会政治的価値（ほぼ近代的価値規範と同義である）をメッセージとして提示する傾向のほうが顕著である。言い換えれば、この時期のプラナカンにとって、創作小説とは政治をめぐる論争的発言のためではなく、望ましい社会政治的規範を読者に提示するための媒体であったことが確認される。

続いて、最初期の創作小説に顕著な娯楽的な犯罪小説という様式は、1910年代のタンの作品にも見られるが、その頃次第に創作小説の中心的話題ではなくなってきていることも確認される。タンの場合は、犯罪小説と並行して、同時代の若い世代に望ましい近代的価値規範を描くことに関心が向かっている。このことから、1920年代に入る頃は、犯罪小説などの娯楽作品を書くことから近代的価値規範の問題を書くことに、プラナカン作家の関心が移行する時期だったと言える。もちろん、娯楽作品はその後も書き続けられたが、多くの作家たち関心が近代的価値規範へ向かうようになったのは、この時期であったと考えられる。こうして、1920年代中頃以降は、プラナカンの創作小説の主要作品は、冒頭で紹介したように、近代的価値規範を取り上げる作品となり、最初期の創作小説のようなセンセーショナルな娯楽性は退潮することになった。

このようなことから、1920年代に入る頃は、東インドのプラナカン文学において、創作小説というジャンルの境界が画定する時期であったと結論付けることができる。この頃、プラナカンの創作小説は、最初期のそのようなセンセーショナルな娯楽作品から近代的価値規範の問題を取り上げる作品様式への移行が進んだ。しかも、この時期、プラナカン社会では政治的関心（活動）の盛り上がりが見られたが、創作小説の分野では、政治的課題を論争的に扱う方向には向かわず、総体的には、社会習慣などをめぐって近代的価値規範を取り扱う方向へ向かった。このような経過を経て、プラナカンの創作小説では、近代的価値規範の問題を論じることが、この時期以降、より一般的になっていった。

#### おわりに

タン・ブン・キンは、数多くの論争的な言動とともに、1920年代に入る頃の東インドで最も政治的にもラジカルなプラナカンのジャーナリストのひとりだった。彼は創作小説の書き手としても、多くの作品を残しているが、彼の小説作品は、彼のジャーナリズムでの言動をそれほど反映せず、政治的に過激なものではない。また、彼は、19世紀末以来の東インドの最初期の創作小説の様式を引き継いで、センセーショナルな犯罪を題材にした娯楽作品なども書く一方で、同時代の若者世代の価値観に沿った近代的価値規範の問題を取り上げるような作品を書いていた。このことは、東インドのプラナカンの創作小説において描かれる話題の種類とその描き方に、ひとつの境界が画定してゆく過程に沿っているも



のと見る事ができた。こうして、この流れを受けて、1920年代半ば以降にプラナカンの創作小説の主流となった作品は、総じて、近代的価値規範の問題を取り上げる作品となり、そこでは、最初期の作品の娯楽的性格は退潮している。このようなジャンル境界の画定は、1910年代を通じて最も政治的にもラジカルと言われてきたタン・ブン・キンの作品でも確認できるものだった。このような意味で、タン・ブン・キンの創作小説は、1920年代に入る頃の東インドのプラナカンの創作小説におけるジャンル形成の過程を映し出す作品として、ひとつの典例となると結論付けることができる。

#### 付記

本稿作成において、財団法人大和銀行アジア・オセアニア財団から助成を受けました。謹んでお礼申し上げます。

#### 脚注

- 1) タン・ブン・キンの経歴と作品についての基本的情報は Salmon [1981 : 310-313] の記述に拠る。
- 2) 最初期の創作小説で最も有名なものとしては、西欧人の妾（ニヤイ、njai）であるプリブミ（インドネシア人）女性の財産を狙った殺人事件について物語る『ニヤイ・ダシマ物語』（*Tjerita Njai Dasima*, 1896年）がある [Francis : 1896]。
- 3) このことは、インドネシア人だけでなくプラナカンの作品にも見られる傾向である。詳しくは、次章の記述を参照のこと。
- 4) 法に基づく結婚を重視するような近代意識の表出は、注2) で紹介した『ニヤイ・ダシマ物語』に見られる。

#### 文献

- Francis G. 1896. *Tjerita Njai Dasima*. Batavia : np.
- Penghidoepan*. 1925-1942. Soerabaia : Hoa Kiao.
- Salmon, Claudine. 1981. *Literature in Malay by the Chinese of Indonesia*. Paris : Editions de la maison des Science de l'Homme.
- Tan Boen Kim. 1912. *Boekoe Tjerita Resianja Goela-goela*. Batavia : Kwee Khe Soei.
- \_\_\_\_\_. 1914. *Nona Gan Jan Nio atawa "Pertjinta'an dalem Rasia"*. Batavia : Tjiong Koen Bie.
- \_\_\_\_\_. 1916. *Nona Kim Kian, Satoe Tjerita jang Betoel telah Kedjadian di Kota Canton sebeloenja Petja Revolutie jang Kesatoe di Tiengkok*. Batavia : Tjiong Koen Bie.
- \_\_\_\_\_. 1918. *Rampok di Grissee*. Batavia : Goan Hong.
- \_\_\_\_\_. 1919. *Nona Lan-Im, Soeatu Tjerita Terdjadi di Betawi pada Waktoe belon sabrapa lama*. Batavia : Goan Hong.
- \_\_\_\_\_. 1920. *Peroesoehan di Koedoes*. Batavia : Tjiong Koen Liong.
- \_\_\_\_\_. 1923. *Sair Nona Fientje de Feniks dan sakalian ia poenja Korban jang Benar Terdjadi di Betawi antara Taon 1912-1915*. Batavia : Khoe Tjeng Bie.
- (初版は1916年出版と推測されている)
- Tjerita Roman*. 1929-1941. Soerabaia & Malang : Hahn & Co (& The Paragon Press).

## Creative Novels in Malay by the Peranakan Chinese of Dutch East Indies on the Eve of the 1920s : Focusing on Tan Boen Kim

Masanori KITANO

*\*Kurashiki University of Science and the Arts,  
2640 Nishinoura, Tsurajima-cho, Kurashiki-shi, Okayama 712-8505, Japan*

(Received September 28, 2001)

This article discusses the development of creative novels in Malay by the peranakan Chinese of Dutch East Indies on the eve of the 1920s by examining Tan Boen Kim, one of the most politically radical peranakan journalists of the time.

The earliest creative novels around the 1900s exhibited various characteristics of entertainment novel. By contrast, creative novels by the peranakan Chinese in the middle of the 1920s concentrated on dealing with modern value systems.

Tan Boen Kim produced many entertainment novels. However, he also dealt eagerly with modern value systems. Besides, he showed only a small interest in political topics in his novels. In conclusion, Tan Boen Kim's novels are a typical example that represents the shift in the literary character mentioned above.